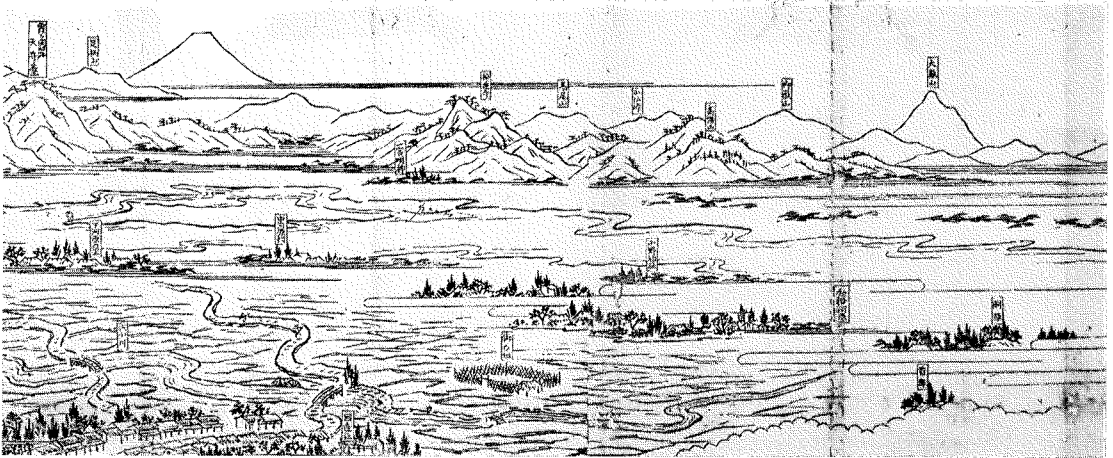


あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.39

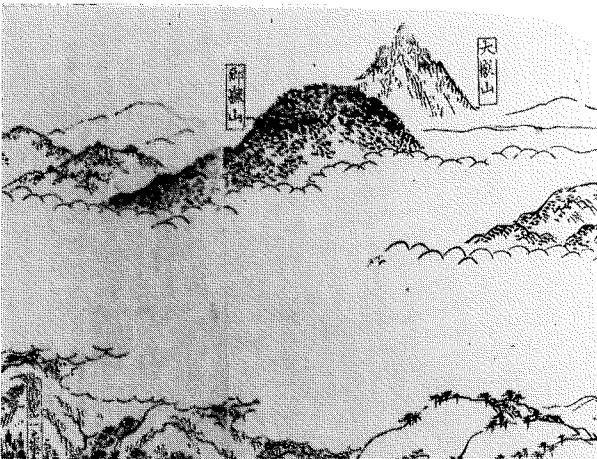
al museo



多摩川の風景7 山を望む・御岳山

『武蔵府中国府台勝概一覽』(上図)の山々を富士山よりさらに右手に目を移して行くと…。今もハイキングでお馴染みの高尾山、甲州街道が越える小仏峠(というよりも中央自動車道の小仏トンネル…)、そしてひときわ目立つのが丸い頂の御岳山(青梅市、929㍍)ととんがり帽子の大岳山(奥多摩町・檜原村、1267㍍)ですね。2つの山は多摩川の上流に近いこともあって、古く

から信仰の山でした。特に御岳山は、前回の大山と同様に農業の神として、関東地方の至るところに御岳講が作られ、毎年の参詣が行われました。狼を描いたお札は、お犬様と呼ばれて農家の蔵などに貼って盗難除けとしました。2つの山は江戸東京の西の守護神としても、東流する多摩川を悠然と見送り(『調布玉川絵図』左下)、街道を行く旅人をはるかに見守ってきた(『甲州道中分間延絵図』右下)のです。(〇)



民具は語る —フィールド調査から—

後藤 廣史

いわゆる民具と呼ばれるものの収集は、市民からの情報提供による寄贈が大半を占めています。「物置を壊していたら、何だか訳のわかんない、昔のものが出てきた」との情報。早速出掛けてみると、現当主には「昔のもの」であるが、隠居（先代）にとっては「懐かしいもの」が、物置の前に置いてある。そこで隠居はこう語る「昔はなあー」「こうやって使うんだよ」。それを聞いていた当主（息子）「へえー、初めて聞いたよ」。「まだまだあるはずだ」と、しまいには物置の隅から隅まであれこれ物色。「あったあった」、そろりそろり暗い所から出してみると、出るわ出るわ民具の山。中には隠居も知らないものまで出てくる。そのうち奥さんや子供まで出てきて、あれこれ話がはずむ。

以上が、我々民俗担当学芸員が資料収集に向いた時によくある場面、会話の一例です。先日のこと、市内のT家にお邪魔した折も、まさにその通りでした。

使われなくなった民具

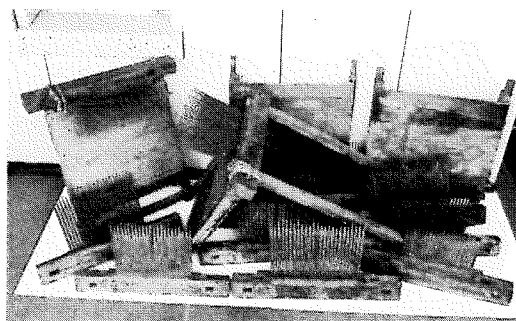
T家では、屋敷地にある納屋のひとつを取り壊すため、中に入っていた民具を整理していました。燃えるものを燃していた途中で、郷土の森に連絡してみようということになったそうです。

我々が到着した時には、鍬は何本かを除き、柄は燃され、燃え残った刃の部分だけが、まとめて脇に置いてありました。鍬といえば田畑の耕起に使う農具、そこで生業のことを聞いてみると、かつては水田が1町歩ほどあり、そのうちの10分の1がドブツタ、それ以外の田んぼでは裏作に麦を作り、今は減反で2年ほど前から水田は作っていないことを知りました。この納屋の地下は△口（地下室）となっていて、かつては養蚕の桑を貯蔵していました。近年は椎茸栽培をしていた納屋です。もうひとつの納屋も同様に、地下の△口で芋などを貯蔵していまし

た。米蔵の入口には御岳神社のお犬様のお札（火防盜賊除）が貼ってあり、2階から脱穀に使う千歯扱き^{せんば}が11丁も出てきたのには隠居もびっくり「しらねえなー」。肥桶の底を見ると「昭和拾年八月造」「昭和式拾七年七月」などと墨書があり、隠居の先代と先々代の記名があります。つまり明治前期から現代にいたるまでの約100年、4代にわたって使用された民具が、この土蔵や納屋に詰まっていたことになるのです。

ここで府中の生業を概観してみると、明治初期、ハケ上では麦作が、ハケ下では稲作が主流を占めていました。明治後期になると養蚕が盛んとなり、農家はこぞってオカイコを育てて、現金収入の途を求めようになります。戦争を境にして養蚕はすたれ、副業を手掛ける農家もありましたが、近年の減反政策もあり、稲作から手を引く農家が増え、今では市内でも専業農家は数えるほどしかいません。

このような時代の流れにあつて、使われなくなった民具は物置の片隅に追いやられ、次第に人々の記憶から忘れられていくのです。T家のように約100年もの間、4代にわたって各時代で使用された民具も、例えば千歯扱きを使用したことがない隠居に対し、11丁も所蔵していたことから大農家であったのが、隣近所で共同で脱穀をしていたものか、どこで購入したものかなど、聞き取れるものではありません。2代前



▲千歯扱き11丁

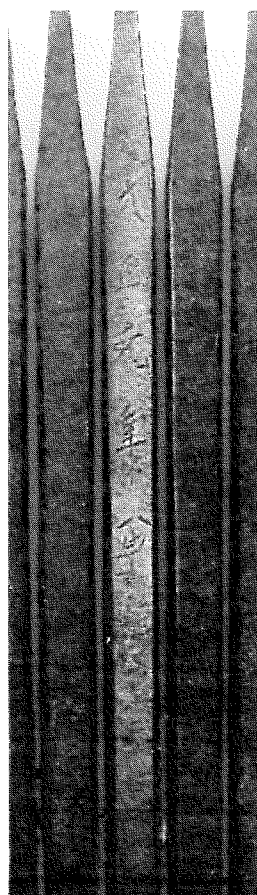
のことさえ詳しくわからないことを、実は民具は語ってくれるのです。

民具は語る

それは、千歯扱きの台木に押された焼印から鳥取県倉吉で生産されたものが、はるばる府中まで運ばれてきたこと。穂（千歯扱きの歯）に明治や大正の年号、製作者の名前がみられることから、千歯扱きの製作のことがよく理解されること。また穂と穂の隙間に残る靱から、麦扱き用と稲扱き用の別があったこと。鍬は、砂地や粘土質という土質に合わせて、サンボンコやシホンコと呼ばれる爪鍬や金鍬が使い分けられたこと。柄と刃の角度はほぼ同じで、主に田畑のサク切りに使用した鍬であること。鍬の柄の長さが少しずつ異なるのは、使用者の体格と関係があるという予想がつくこと。また金鍬の刃の形状がそれぞれ微妙に異なるのは、使用者の

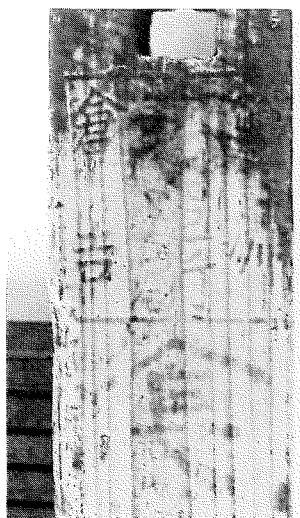
癖を見極めて、野鍛冶が打った鍬であること。すり減った釣瓶つるべの滑車かたしやからは、水汲みの労苦が思われること。肥桶ふたの蓋に「七」「二十三」などとみえることから、少なくとも23個以上の肥桶があったことになり、これら大量の肥桶からは自家の肥桶だけでは間に合わず、他所から下肥を運んできたことが容易に想像できること。また肥桶の焼印「製造人 多磨村車返 倉田正雄」なる人物が、市内白糸台で商いを営んでいたことなどです。

このような人々の暮らし、生業にかかわる民具は、古文書などのように記録に残ることがまずありません。これら記録に残りづらい人々の民俗史を、フィールドでの聞き取り調査をまじえ記録していきます。「語ってくれる」民具を調査、研究することにより、地域を知ることになるのです。寄贈された民具は、博物館に保管され、後世に継承されていくのです。

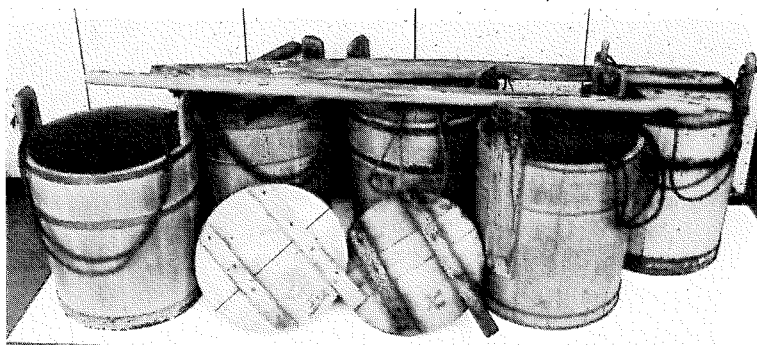


◀千歯扱き▶

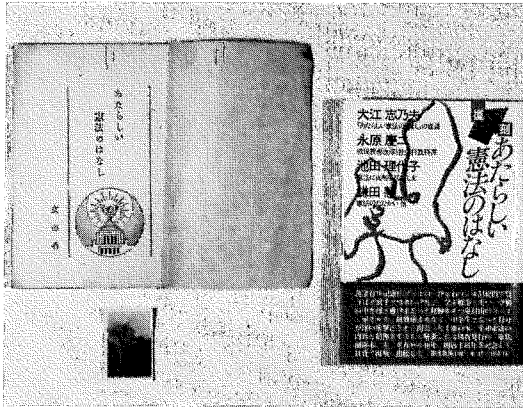
「長」（製作者墨書）
「伯州製造所倉吉」（焼印）
「大正元年（宇作）」（刻書）



▲肥桶▼



講座 地域から見る 教育史 その4



＝あたらしい憲法のはなし＝

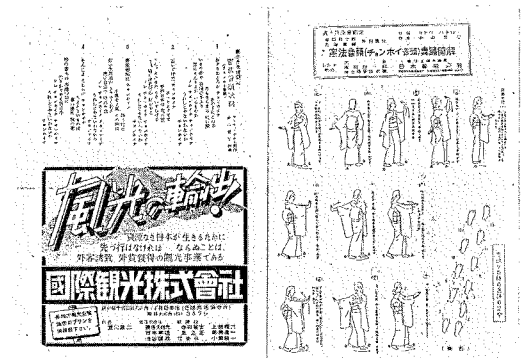
10年程前、JR武蔵野線新秋津駅前のラーメン屋さんで、『あたらしい憲法のはなし』という中学校の副読本を復刻して自費出版した話が話題になりました。この副読本は、敗戦後の新憲法施行間もない頃に文部省が作ったもので、憲法の理念と意義をやさしく説明しています。「みなさん、あたらしい憲法ができました」で始まる語り口や、戦争の放棄をうたって「しかしみなさんは、けっして心ほそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません」などの文に強く印象付けられた子供たちも少なくなかったことでしょう。幻の名著と言われたこの本も、現在では2、3種類の復刻版が出版されています。

郷土の森博物館所蔵の教育資料の中にも、昭和22年(1947)発行の本書がいくつか含まれています。そのうちの1冊に挟まっていた写真の主は、使用者本人でしょうか。(上の写真、左は原本、右はその復刻版)それはともかく、今回は新憲法がどのように地域や学校に受け入れられたかの一端を示す材料を、教科書類と一緒に寄贈された資料群の中から見つけてみました。

1つは、昭和23年7月に北多摩郡連合青年団長から西府村(現・府中市)青年団長に宛てられ

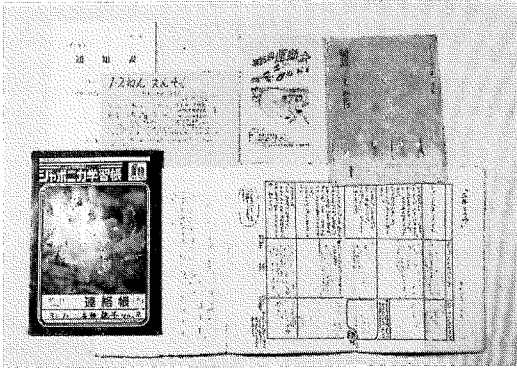
た夏季大学講座の通知文書です。演題は元国務大臣金森徳次郎による「新憲法の精神」で、場所は立川公民館。「青年として新憲法の真髄をつかんで新しい日本を作らねばならんと存じます。うんとすゝめて下さい」「新憲法作成の中心人物金森先生の熱と意気にみちた一大絶叫は必ずよろこばれると信じます」当時の雰囲気は、一青年団あたりの参加費が百円とジャガ芋1貫目という記載からも知られます。集められた芋は、講師と秘書と運転士に渡されたようです。

もう1つは、「憲法音頭(チヨンホイ音頭)舞踏図解」とその楽譜です。サトウハチロー作詞・中山晋平作曲。「古いすげ笠チヨンホイナさらりとすてて平和日本の花の笠とんできたきたうぐいすひばり鳴けば希望の虹がでる…」この紙も教科書と一緒に出てきました。



＝そして現代へ＝

平和憲法が制定されると、その「理想の実現は、根本において教育の力にまつべきもの」と前文でうたわれた教育基本法も施行されました。それから今年でちょうど50年。この間の教育資料を収集していくことも、博物館としては重要です。これに加えてリアルタイムの資料もとい



うことで、当館では、小学生のいる市内のある家庭に協力いただいて、1年間の学校生活に関わる資料をまるごと譲^{ゆづ}ってもらうこともしました。今市内で使われているのと同じ教科書を出版社から購入するのではなく、子供の手垢^{てあか}にまみれた教科書をはじめ、あらゆる学校行事に関する文書や連絡帳・通信簿に至るまでの資料群を保存していきます。もちろん今は公開できない内容のものもありますが、必ずや遠くない将来、意義のある博物館資料として活用することができるのではないのでしょうか。

教育をめぐるさまざまな議論は相変わらず盛んです。そんな中で大切なことの1つは、教育の受け手に立った視点、地域社会の中での教育の視点ではないのでしょうか。そのための材料の1つを地域博物館においても提供していきたいと思います。ひとまず、おしまい。 (〇)

コウム

☆超大物の予感？ ハール・ボップ彗星来たる！

昨年の3月に話題となった百武彗星よりも明るくなるのでは……と期待されている大彗星が地球に接近中です。この彗星は1995年7月にアメリカ人のハール氏とボップ氏によって発見されたことから二人の名前をとりハール・ボップ彗星（以下「HB彗星」と略す）と名付けられました。発見当時、HB彗星は木星軌道の外側に位置し、約10等級の明るさだったのですが、あのハレー彗星でさえ、同じ距離では約15等級の明るさしかないのです。このことからHB彗星はハレー彗星を上回る超大物ではないかと考えられました。HB彗星の軌道計算から、地球と太陽に最接近するのは、それぞれ3月22日、4月1日だと分かっています。ちょうどその前後がHB彗星の見頃となるでしょう。今年に入ってからには明け方の東の空に位置していましたが3月中旬からは夕方方の西空低くでその姿を見ることが出来ます。HB彗星を観察するには、西側に高いビルなどの障害物がない場所を事前に探しておきましょう。期待どおりに明るくなれば、長い尾を引くHB彗星の雄姿を肉眼でも見ることが出来るはずですよ。 (Bahi)



〈ハール・ボップ彗星〉

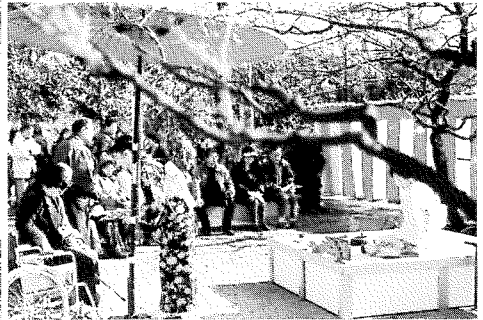
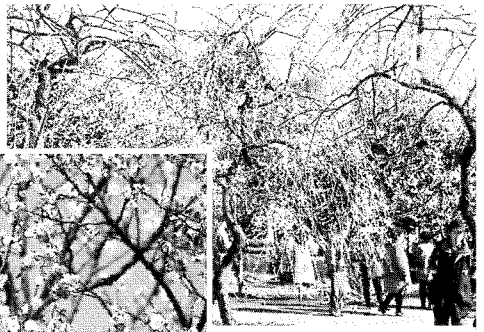
撮影日時：1997年2月20日 5時00分30秒（露出2分）
撮影地：山梨県大月市
撮影機材：ニコンF3、f300mm F2.8（開放）
フィルム：フジ・スーパーG Ace 800
撮影方法：赤道儀によるガイド撮影

カメラ アングル

梅まつりは

大盛況!! 1月下旬～3月中旬

例年よりもやや早咲きの梅が園内いっばいに広がり、甘い香に誘われて来る人の数々……年々、郷土の森の梅を見に訪れる人が増えています。2月23日には、1万人を越える来園者を数え、まさにおまつり状態の1日でした。野点茶会も屋台村も人々で埋め尽くされていました。梅の花にこれだけたくさんの方が集まったということは、皆、いかに春を待ちこがれているかということの証明でもあるのです。



INFORMATION

プラネタリウム冬番組、好評につき投影期間延長(～5/5まで)！ 「宇宙の放浪者“彗星”～ハール・ボップ彗星来たる～」

プラネタリウムでは、前ページで紹介したHB彗星を迎えるにあたって制作した冬番組『宇宙の放浪者“彗星”～ハール・ボップ彗星来たる～』を投影しています。この番組は、「ほうき星」とも呼ばれる彗星を詳しく紹介すると共に、HB彗星が、いつ、どこに見えるのかを盛り込んであります。本編では、内容の監修をしていただいた高柳雄一氏（NHK解説委員）によるナレーションで、みなさんを広大な宇宙空間へとご案内しています。〈今世紀最大級の彗星のひとつ〉と呼び声の高いHB彗星のことを少しでも知っておけば、本当の空で見たときの感動がさらに深まることでしょう。この彗星をみなさんと一緒に観察しようという『HB彗星・特別観望会』を3月下旬と4月上旬の週末に行います。望遠鏡で観察する前に、プラネタ

リウムでの冬番組観覧、さらにHB彗星の最新情報や、どのような点に注目すれば良いのかをご案内いたします。

今回の特別観望会では、毎月行われている定例の観望会とは違い、往復はがきによる事前申込みとしました。マスコミなどで大きく取り扱われると、収拾がつかないほど多くの方が集まるのでは……と考えたのです。本来なら一人でも多くの方にご覧いただきたいのですが、十分にHB彗星の姿を楽しめるよう定員制（150名）での実施という選択をせざるをえませんでした。

太陽系の彼方から、長い年月をかけてやって来るHB彗星。超大物を予感させるその姿に、みなさんもぜひ注目してください。何しろ次回この彗星を見られるのは、およそ2000年後なのですから……。

中国唐代の白磁

最近の発掘調査

濃畑ビル地区から
和田信行

日本の古代国家にとって、中国は様々な思想・文化の源でした。同時に様々な文物の発信源でもありました。今回出土した白磁は中国唐代の製品で、大陸との玄関口である北九州や都から遠く離れた東国では超高級品といえる代物です。

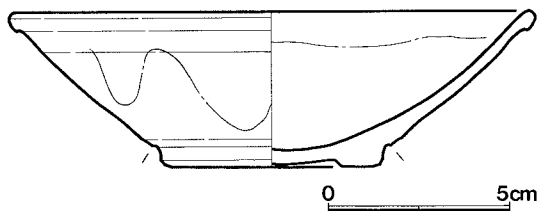
白磁が出土した場所は、府中町2丁目のビル建設予定地で、京王線府中駅の東約200m、国庁推定地と目される京所地区より北東約400mの地点です。竪穴住居跡を掘り下げている途中で見つかりました。竪穴住居跡は市内で今までに見つかっているものと大きさなど何ら変わりのないものでした。この竪穴住居跡からは、白磁以外にも土師器の甕と須恵器の坏が出土しています。

話題の白磁は碗の形をしたもので、約3分の1ほどしか残っていませんでしたが、直径は14.2cmに復元でき、高さは4.35cmでした。その特徴は、① 畳付きの幅が広くて低い（高台の輪の形が蛇の目のように見えるため「蛇の目高台」という）、② 高台から直線的に外側に立ち上がる、③ 口縁の外側が丸く膨らんでいる（「玉縁」という）、の3点です。今までの研究成果に照らし合わせてみると、これらの特徴は中国の河北省の定窯という窯で焼かれたものに似ていて、この窯の製品と考えられます。製作年代はおおよそ9世紀の前半と思われる。

白磁が、なぜ貴重であるか。それは、都や寺院など非常に限られた場所でしか見つからないからです。とりわけ東国での出土は国府跡や国分寺跡など重要な施設にほとんど限定されています。市内では今までに、片町の高安寺付近や美好町、八幡町で数個が見つっていますが、いずれも、底部や口縁の小さな破片で、今回のように全体の形のわかるものはありませんでした。わずか3分の1ですが、これほど残りのよいものは都内でも初めての出土といえます。このように、普通に見つかる土師器や須恵

器に比べて絶対量は極めて少ないのです。現在は、中国まで飛行機を使うと数時間で着きますし、中国製の品物が身近に氾濫しています。しかし、その当時中国と日本の往来は、奈良の唐招提寺を建てた鑑真和尚を思いおこせば明らかのように大変な危険が伴いました。いったい中国からはるばる府中まで運ばれるのに、どれだけの労力が費やされたのでしょうか。

一緒に出土した土師器の甕と須恵器の坏は9世紀末～10世紀初頭のものでしたので、はるばる日本に渡ってきてから長い間大切に使われ続けたことも推測できます。ただ不思議なことに、長い間使われていたにもかかわらず、器の表面にはほとんどキズが付いていません。貴重品であるがためにほとんど使われることなく、大切にしま



われていたのかもかもしれません。

ところで、こうした超高級品である白磁の出土は、国府のなかの構成を推測する手がかりにもなります。つまり、出土地点の周辺に国府の中でも身分の高い入が住んでいた可能性が生じるのです。この点については今後の発掘調査の進展に期待しましょう。

白磁

白磁とは、白色の素地に灰と長石を用いた透明性の釉薬をかけ、高温で焼かれた磁器の1種です。7世紀頃に中国北部で完成されたと考えられています。唐の時代になると、河南省や河北省で盛んに生産されるようになり、唐の終わり頃になると、各地に多くの窯が出現し、大量生産が可能になりました。日本では、朝鮮から渡来した陶工が江戸初期に九州有田の泉山で白磁の磁石を発見し、焼いたのが最初とされています。ですから、江戸時代以前のもは、すべて中国などからの輸入品であったわけです。

あれこれ

カモの話

是政橋から関戸橋付近にかけて、冬場の多摩川を歩くと、見るからに寒々しい水の流れの中に、相反するかのごとく気持ち良さそうに泳ぐカモの集団が目にとまります。郷土の森付近の多摩川はちょうど中流域にあたり、冬は、シベリア東北部の寒帯から亜寒帯にかけての地域より、越冬するため渡来するカモに代表される、水鳥の宝庫となっているのです。今回は、そんな冬鳥の代表であるカモの、河原での生活の一端についてお話することにします。

カモは、冬になると繁殖地が雪と氷で閉ざされてしまうため、南下し、日本などの温帯が亜熱帯の地域に渡って来ます。カモの仲間にはほぼ世界中に分布し、約120種を数えますが、日本にはその内の4分の1に相当する30数種類がやって来ます。新潟県のひょう湖瓢湖しのぼすや、東京・上野の不忍池など、数々の飛来地が有名ですが、多摩川も例に漏れず代表的リストに入っているのです。

河原から眺めていると、カモは何種類も入り交じり合って集まり、水辺で生活をしています。特に冬にだけ姿を現わす種類に限らず、通年見られるカルガモなども含めて実に壮観です。また、水面を泳いでいる時も休息している時もそれぞれの種は群れて行動していますが、実はこの行動、猛禽類に狙われた場合に備えての防御策になっています。群れが大きくなれば、敵に見つかりやすくなりますが、一斉に逃げ出すことで目くらましとなり、捕えられる危険を減らすことができるからです。仮に運悪く一羽、二羽がやられても、その他大勢が無事逃げるのが可能というわけです。

一方、同じ水辺で採食行動もとっていますが、これらの様子もそれぞれで特徴があります。頭を水中に入れたりして餌をとるマガモやオナガガモ、水面にくちばし嘴をつけ、ついはむようにして採

食するコガモ、大きな嘴を水に深く差し込み、集まって輪を描くように泳ぎながら採食するハシビロガモなど、注意してよく観察すると、その違いにはつきりと気付くはずですが、これらは、主食にする食物の種類が異なること、同じ種類の食物でも大きさに違いがあること、あるいは採食の仕方が異なること、そして同じ環境の場所であっても、異なる所を利用することなどの理由に基づいています。その結果、様々なカモの種類が集まって生活することが可能になっているのです。

さて、カモの一群に注目していると、こんなことにも気付きます。ほとんどの種で、雄の羽色が雌より目立っているのです。実はこれ、越冬期間中に限ったことであり、繁殖地に戻れば換羽して、雄も雌と同じように地味な羽色になってしまいます。従来、地味な羽色は保護色となり、天敵から見つかりにくい状況を作り出す

からです。では、何のために越冬地では羽色を目立たせる必要があるのでしょうか。

カモは、繁殖が終わるとつがい解消してしまいます。日本に渡来する多くの種は、雌が抱卵し始めた頃に雄が去ってしまうようです。そして次のシーズンの繁殖の

ために再び新たな相手を見つけるのが、越冬地を訪れている期間なのです。このため、雄の羽色は、雌が自分と同じ種の雄を間違いなく選ぶために、その種特有の目立つ色合いを持つものと考えられています。

皆さんも新しい発見を求めて、河原へ出掛けてみてください。(N)

あるむせお 第39号

al museo イタリア語
“博物館で” “博物館にて” の意
発行日 1997年3月20日
発行 (財)府中文化振興財団
府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921